口　演

「かむ意識を高める親子健康教室」参加者の食生活状況について

（平成28年度大学・地域連携事業）

岩瀬彩香・友竹浩之・安富和子・木下智恵子・竹村　香

【目　的】

近年，学童期のかめない，かまない食習慣が指摘されている．平成22年度児童生徒の食事状況等調査報告書によると，「食事はゆっくりとよくかんで食べる」のは，小学校男子42.8％，女子53.7％となっており，咀嚼に対する意識の低下がみられる．また，小学生の好きな料理は，１位寿司，２位カレーライス・ドライカレー・ハヤシライス，３位オムライス，４位ラーメン，５位デザートの順であった．これらの料理は，比較的かむ回数の少ない料理である．

本研究は，「親子健康教室」における咀嚼・栄養指導および炒り大豆の摂取が，咬合力や握力，食意識に与える効果を調べることを目的とする．今回は，教室前における参加者（小学生）の咀嚼や食に対する意識および食生活状況について調査した結果を報告する．

【方　法】

平成29年１月から２月にかけて実施中の「かむ意識を高める親子健康教室参加者23名（小学校高学年）およびその保護者を対象とした．飯田女子短期大学研究倫理委員会の承認を得た後，参加者には，事前に教室の目的，概要について説明を行い，調査に関して参加者全員から同意を得た．

教室前後の調査項目は，食生活や噛むことに関する意識調査（質問紙），握力，咀嚼力（ガム・グミを使用）とした．教室は初回に「咀嚼・栄養指導」を行い，期間中，１日20粒の炒り大豆を毎日摂取してもらい，摂取状況や噛むことの意識，食生活状況を毎日記録してもらっている．今回は初回の調査で得られた結果（ベースライン）を解析した．

【結果と考察】

今回参加した小学生のかむ意識得点と，食意識得点の関連を調べた結果，有意に相関していた（$P<0.001$）．咀嚼力判定ガムによる結果は，ほぼ全員が高得点であった．一方，咀嚼力判定グミによる調査は，参加者によりバラツキがみられたが，かむ意識や握力とは相関がみられなかった．

今回の初回調査より，かむ意識を高めるためには，食生活全体にアプローチする食教育を行っていく必要があることが示唆された．

口　演

教育史かるたの実践報告（続報）

―知識と思考との関係を考察する(2)―

奥　井　現　理

【目　的】

本研究の目的は，前回報告において示したように，知識と思考との関係を考察することである．本発表は，実践報告の続報であり，かつ，知識と思考の関係に関する推論を進めてゆく過程を記録したものである．

【方　法】

発表者は，平成27年度と同様に，平成28年度教育史の授業を，毎回三部に分けて運営した．一部目は「近現代西洋教育史シート」(以下「シート」）の演習，二部目が伝統的なスタイルの講義，そして三部目が，「教育史かるた」である．発表者は，前回報告において学生は「シート」と教育史かるたによって暗記した知識をもとにして，伝統的スタイルの講義においてより活発な思考を行うのではないか，という，多分に希望的観測に基づく推論を示した．本報告は，改良した教育史かるた（国ごとに縁取りの色をそろえたため，学生にとって札の特定がやや容易になった）の実践を通して，さらにその推論を進めた過程を記録したものである．

【結果と考察】

改良により，教育史かるたの習熟はやや早まったと考えられる．そのことは，学生にとってはゲームを純粋にゲームとして楽しむ時間が長くなったことを意味する．発表者はこの教育史かるたの改良当初，このことが，二部目の伝統的な講義に取り組む余裕を生み出し，活発な思考を行っている兆候を示すのではないかと考えていた．

結果として，そのもくろみはうまくいかなかった．入念な観察による評価では，あまり前年度との違いを見いだすことができなかったのである．ただ，学生からの反応（アンケートによる）に，新しい要素を見いだすことはできた．昨年度と同様に，単に「面白い」「楽しい」というもの，「シート」と「かるた」の相乗効果を感じるという回答が多く寄せられたほか，「覚えられてうれしい」という回答が複数寄せられたのである．

ここで，学生の「うれしさ」という新しい要素は，知識と思考の関係に関する推論を補強する何らかの材料であるかもしれないと発

表者は（希望的に）考えた．すなわち，「覚えられてうれしい」ということは，（論理的対偶として）「忘れてしまって残念だ」ということでもありうる．もしや，学生は，講義に参加しても，一週間後の講義でその内容を忘れてしまっていることを残念に思っており，その残念さが学習効果に何らかの望ましくない影響を与えているのではないか．逆に，前回講義の内容を覚えていればうれしくなり，学習効果を上げることが可能になるのではないか，それが「シート」と「かるた」の効果なのかもしれない，と考えたのである．

講義者の意図はどうあれ，大学の講義は一週間の間隔をほとんど不可避的に設ける．この一週間を，「覚えていられてうれしくなる」期間として用いるということを，発表者は偶然に行っていたのかもしれない．このことは，「記憶できれば思考するようになるのではないか」という推論を直接に前に進めるものではないが，「**記憶でき**（てうれしくなり記憶をより効率的に進めるようにな）**れば**（その派生的な結果として）**思考するようになるのではないか**」といった具合に，命題を補う要素を想定することができたのである．

【結　語】

昨年の学生が，覚えられてうれしかったかうれしくなかったかは，今となっては知ることができないので，教育史かるたの改良が「うれしさ」を直接に生み出したものであるか否かはわからない．すなわち，改良の効果そのものは，現時点では知ることができないと結論づける以外なかろう．そこで，改良が「うれしさ」を生んだか増大させたかは不問にするとして，「うれしさ」が記憶や思考に与える効果に，今後注目することにしたい．

報　告

ベトナムの障害者支援における専門職の協働（事前訪問）

武　分　祥　子

【研究の背景・目的】

背景：2001年から2006年の間，ベトナムでの障害児の教育・福祉・就労に関する現地訪問を行ってきた．さらに2012年からは，研究分担者としてドイツ，スペイン，イタリア，ネパール，デンマーク，ポーランドの障害児・者の調査研究[1]を，2013年にはハノイ赤十字社の障害児支援活動の調査研究[2]を実施してきた．これらの経過から，障害者支援活動において，関係専門職が協力し合い障害者一人ひとりのニーズにあった支援方法を発見し，継続していくための調査研究の必要性を実感し，本研究に着手することにした．

目的：ハノイ市内の特別学校及び療育センターの実践活動を調査対象として，専門職の役割とその具体的内容，協働の意義を明らかにすることを本研究の目的とする．

【研究計画及び方法】

ベトナムのハノイ市を拠点に，特別学校及び障害児療育センターを中心にヒアリング調査と実践・介入調査を実施する．調査日程は，１回の調査で８日間程度とし，３年間で合計５回の現地調査を実施する．ヒアリング調査については，質的調査法によって，特別学校及び療育センターの専門職，障害者及び家族，地域の支援者などを対象に，①療育内容や生活実態，②専門職の支援内容及び課題を主要な柱とする．実践・介入調査については，療育の場で教員らの支援に参加する．

【事前訪問の成果】

2016年11月の事前訪問においては，今後３年間の調査先となる２つの施設に調査を依頼し承諾を得ることができた（ニャンティン特別学校，サオマイ療育センター）．次回の訪問調査（2017年３月４日～10日）に向けて研究協力者とともに準備を進めているところである．

本研究は，JSPS科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号16K04044, 2016年～2018年,「ベトナムの障害者支援における専門職の協働」研究代表者・武分祥子に基づくものである．

---

1) JSPS科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号23252010，2011年～2015年,「特別なニーズをもつ子どもへの教育・社会開発に関する比較研究」研究代表者・黒田学.

2) 三島海雲記念財団　第51回研究奨励金研究「ベトナムでの赤十字社の障害者支援活動に関する調査研究―保健・医療・福祉の協働―」2013年.